

エリザベス時代の言語美意識

－ シドニーの『詩の弁護』から －

山田 耕士

1.

「男たち美しく、女たち遅しく」－これは2002年のNHKテレビ番組『利家とまつ』の広告のキャッチフレーズである。従来なら「男たち遅しく、女たち美しく」であろうが、述部を入れ替えた表現内容に違和感を覚えないとすれば、それは男女についてのジェンダー意識や美意識が今日は以前と相当に違ってきていることを示すようで興味深いものがある。

この表現自体に美が存在すると感じられるであろうか。それは読む人次第だが、形式的にはいくつかのことが指摘される。その前後半部ともに3+3=6字であり、ひらがなでは5+5=10字同数の節である。「男」と「女」、「美」と「遅」は対照対置され、それらは反復される「たち」と「しく」(押韻)により締めくくられる。主語であることを表す助詞は省略され、接続詞も省略、前後半部とも連用形止めで、後の用言は読者が決めるようになっている。「く」は4回、「た」は3回、「お」「ち」「し」は2回反復され、その他は反復されていない。母音ではuは6回、aは5回、oとiは4回反復され、e音はない。子音ではt(chを含む)は7回、kは5回、s(sh)とnは2回反復されており、m音は1回である。それらがすべて相互作用して独特のリズムをかもしだすのだが、そこに美を意識するかどうかはやはり読む人次第であろうし、そのキャッチフレーズの短文を聞く人の場合なら、それを口にする人の声の質と強弱と高低、及びテンポ、さらに表情やジェスチャーにも影響されるかもしれない。

漢字の「美」は「会意。羊+大。大きくて立派な羊の意味から、うまい・うつくしいの意味を表す。」(『漢語林』)という。そこには、人が生活していくな

かで自らを尺度としつつ視覚と味覚を働かせて多くのものから選別判断を下した過程が偲ばれる。

他方、アリストテレスは、『詩学』第7章で、美は大きさや長さ(megethos: size, length)と順序つまり配列(taxis: order, arrangement)次第だと述べている。つまり、生命のあるものもないものもすべて、配列された部分からなるその一全体が一度に視野におさめられる範囲において大きければ大きいだけより美しいという。一全体をなす部分の配列も重要であって、それは人が作る悲劇にあっては初めと中と終りの3つの部分からなる。そして、Else(97)は、アリストテレスにあって悲劇の美は、外側からあてられた装飾にはなくて、論理的な順序と衝撃を与える感情的インパクトとを結合するように筋を組み立てる説得力と手際のよさにある、と説明しているほどである。

アリストテレスのこの機能的な美観を補うものが『弁論術』に見られる。それによると、まず、前提として真実とされることは、「生物はすべて生まれながらにして快樂を求める。それゆえ、快樂はよいものでなければならぬ」(戸塚 66)ということである。そして、美しいものは、

1) 身体の美しさのように、[見た目に]快いがゆえに、その快樂によって望ましい

2) 道徳的優秀性のように、それ自体が無条件で望ましい
とし、美しいものは

1) それ自体望ましいものであって、かつ称賛に値するもの

2) よいものであって、しかも、よくあるがゆえに快いもの

と定義され、両者である徳の諸部分があげられていく。そのようにして美は真と善とにつながる世俗的に価値あるものとされており、そのあたりはこれから見るシドニーの美意識と共通するところがあるように思われる。

2 .

さて、周知のように、英仏百年戦争と国内のバラ戦争の後、16世紀のイギリスは、ルネサンス期に入り、国民意識が高揚するとともに、ギリシア・ローマの栄光とイタリアその他のルネサンス先進国の文化を受容する中、それらを変容し自国の言語文化の中に応用していった時代である。

例えば、1580-90年代、イギリスで大流行するソネット(sonnet)、つまり、14行詩は、各行の音節数や脚韻のルールを守るところに形式に対する詩人の美

意識が働いているが、それは13世紀のイタリアで整った形式でルネサンス詩人ペトラルカ等が恋愛を主題とする詩で使用したもので、ワイワット(1542年死亡)がイギリスへ紹介、サリー伯爵(1547年死亡)が応用、シドニー(1586年死亡)はそのサリーを称賛する傍ら自らもソネット詩集を創作する。また、ルネサンス期にあって従来通り最も高く評価されたジャンルである叙事詩は、イギリスの場合、10世紀の写本『ベーオウルフ』が現存するものの、16世紀にはその存在が知られずゼロに等しかったため、英国版の叙事詩の出版が待ち望まれていた。

そのような理由から、大陸に比べ遅れて来た者の中にあって、1570年代、シドニーやスペンサー(1599年死亡)は、アレオパガスという文人グループを組織し、英詩の韻律法改革を考え、詩や詩人の在り方について論じ、ソネットだけでなく散文ロマンス(シドニーの『アーケイディア』はむしろ散文叙事詩だが)や伝統的な叙事詩を書くことにより、ギリシア、ローマ、イタリア、フランス、ドイツ等に勝るとも劣らない規模と構成のなかにあって英語の語彙を拡大し表現を豊かなものにし、英文学のレベルの向上に寄与していく。ここでは、エリザベス時代中期の花シドニーの詩論にかかわることにする。

彼の詩論は、1581年頃の作とされ、2種類(Henry Olney 出版の *An Apologie for Poetrie* と William Ponsonby 出版の *The Defence of Poesie*)の版本(1595)があるが、両者の長さや構成、内容に重大な相違はない。その内容を要約すると、詩(文学)は、美德の理想的な絵姿を示すことにより、人を楽しませつつ、教え、かつ人の心をその美德に向かって行動させる。プラトン他による色々な文学批判はすべて当を得ない。英文学の現状は批判され、然るべき内容と表現法が説明され、猿まね詩人ならぬ真の正しい詩人の出現が期待されつつ、結論として詩は弁護・称賛される。

この詩論を読むと、その表現法と構成に美意識、それも古来の伝統的な弁論術(レトリック)に裏打ちされた言語美意識が感じられるように思われる。ここでその意識が喚起される所以を分析してみよう。

まず、タイトルの *Apology* とか *Defence* という言葉は、読者を弁論術の世界へ誘う。古来、西洋弁論術は、アリストテレスにあって明らかなように、過去の正義を弁護・弁明し、不正を告訴・告発する法廷弁論、現在の人や物事の美と名誉を称賛し、醜と不名誉を非難する演説もしくは演説的弁論、それから、未来の損得や利害に関して勧告あるいは諫止する議会もしくは審議弁論の3種

類からなる。シドニーの詩論は、主として法廷弁論だが、演示弁論と審議弁論も応用しており、それだけ複雑な構成になっている。

弁論もしくは言論一般の構成法について、アリストテレスは提題 [主題の提起] と論証 (証拠立て) の二つを不可欠としながら、序論と結論も認めている。言論の構成はその他 5 部や、さらに 7 部説もあり、イギリスのレトリック学者 Wilson は 16 世紀半ばに 7 部説を採った (Derrick 33-35)。シドニーの詩論はその 7 部からなる古典的弁論になっていることを論証したのは Myrick (46-83) だった。そのミリックに対し Hardison は 3 部説を出したが、私はミリック路線の Shepherd (11-13)、Hadfield (132-69)、Maslen (35-37) たちの方が妥当と考える。そのシェパードの分析によると、次のようになる。

- I exordium 序論：馬術を称賛する人を例にしながら、子供の笑い種になるほど軽視されている詩の弁護論に対する聞き手 (読者) の好意を獲得。
- II narration 陳述：詩の反対者に対して詩の価値ある諸事実を簡潔に陳述。その事実とは、(a) 詩はあらゆる学問に先行すること、(b) 詩は至る所にあり、普遍的なこと、(c) 詩人はローマ人により vates、つまり、占い者、先見者、あるいは予言者とされ、ギリシア人により poet、つまり、maker とされたこと。
- III proposition 提題：楽しませつつ教える模倣・フィクションとしての詩は称賛・支持されるべきであること。
- IV division 区分：陳述中の事実を体系的に解釈することにより提題を論証するため、詩を (a) 題材 [内容] と (b) 形式に分類。題材から、宗教的なテーマを扱う詩人と、道徳・自然・天文・歴史等を扱う詩人と、独自の完全な、もう一つの自然を作り上げる「right 本当の」詩人を区別。形式から、詩人を英雄詩人、抒情詩人、喜劇詩人、風刺詩人、短長格詩人、哀歌詩人、牧歌詩人に区別。
- V confirmation 論証：詩を他のすべての学問・学科と比較・検討、(a) 世俗の学問は神聖な学問の神学と峻別され、学問の最終目的は原罪以前の自然に等しい完全なものを知らせ、墮落した人の魂 (理知) を洗練し、人を悪から救出して精神的に更生させ、正しい行為を実践させること、(b) 哲学は教えるが楽しくないこと、(c) 歴史は楽しいが教えないこと、(d) 詩は楽しく教える最高の学問であること。次に、詩の種類を比較・検討。
- VI refutation 反駁：詩に対する諸非難に反論、(a) 悪口屋はこれを嘲笑えば十分なこと、(b) 韻文は甘美で整然としており、記憶に役立つこと、(c) 詩は時間の無駄使いではなくて最高の学問として最も有益なこと、(d) 詩人は何一つ断言しないので嘔吐きでない (事実がどうであるかないかではなくて、どう

あるべきかあるべきでないかを告げようとする)こと、(e)詩は悪用されなければ色恋や無気力な人間を作るものではないこと、(f)プラトンが追放したのは詩を悪用した者たちであり、彼は詩に正当な敬意を寄せていたこと。

[digression 余談: 当代のイギリス作家たちが詩を辱めている現状とその修正法を指示

- 1 陳述: 現状説明
- 2 提題: 詩人は何をすべきかとそれをどのようにすべきかを知ろうと努めねばならないこと
- 3 区分: 技法と模倣と練習の必要を指示し、議論すべき諸問題を列挙
- 4 論証: 主題、表現、欠陥の扱いについての結論、英語称賛
- 5 結論]

VII peroration 結論

ここに認められる構成・形式はシドニーが意識的に採用し応用したものであり、それにより得られる論理的順序のもたらす美はこの詩論の説得力を強めるものと彼が期待したと解釈される。今日も読者が絶えないのは、その構成美が馬術の名人のことで始まる第一文からソネット作りを知らぬ人を呪う最後の文まで、豊かに肉付けされているためであろう。比較的長い文が続く中にスキがなく、悠揚迫らず、しかもウィットとユーモアに富んだレトリカルな名文である。

3 .

次に、シドニーの詩論中の言語美、具体的には、英語の美意識や考えを見てみよう。彼にとって言語表現のポイントは、いかなる言語にしる頭に浮かんだことを美しく、かつ、適切に表現することであり、彼が否定的なことは、

- 1) 紅白粉を塗りたくったような術学的な表現
- 2) キケロやデモステネスを履き違えて、彼らの引用に甘んじること
- 3) 直喩を使いすぎることに
- 4) 表現技術をのべつまくなしに用いること

である。

他方、シドニーが英語を称賛する根拠は、

- 1) cases 格、genders 性、moods & tenses 法と時制の変化が少なくやさしいこと

- 2)ギリシア語とラテン語それぞれ最善のものをとった借用語による語彙の増大から、英語が混成語になっていることはマイナスでなくて、表現の豊かな言語になっていること
- 3) 韻文を作る上で音節の音量によるにしる、脚韻によるにしる、音節の強弱によるリズムにしる、英語の可能性は豊かなこと

である。そのように主張するなかで彼は、イタリア語、ドイツ語、フランス語、スペイン語と比較して英単語の諸特徴（母音と子音がともに豊かなこと、語によっては末尾前第3音節にアクセントがあること、アクセントの存在、caesura 中間休止、男性韻と女性韻と motion のような *sdrucchiola*）へ強い関心を示し、それらの活用を期待する。そして、結論として、シドニーは、我が英語は、「詩を敬い、詩から敬われるのに最も適している」としている。この敬い、敬われると訳した *honour* の語源には「美」という意味が含まれていることは OED に認められる。

問題は、なぜシドニーがそのように言葉や表現にこだわったのかということである。もちろん、それは英詩復興への期待以外のなにものでもあるまいが、そこには、詩の読者への熱い思いが表れていると考えられる。既に触れたように、シドニーは、詩は子供の笑い種どころか、あらゆる学問のなかで神を扱う神学は別にして人間を扱う俗学では最高のものと考えた。彼によれば、およそ学問の直接の目的は「*wit* 理知」を洗練すること、「記憶を豊かにすること、判断力を強化すること、そして想像力を拡大すること」であるが、最終的な目的は「土くれの住家のために一層悪くなっている我々の墮落した靈魂にできるかぎりの高い完成に向かって我々を指導し引き上げること」とし、最高の学問たる詩は「ただよく知ることだけでなく、よく行うという目的をもって、人が倫理的に、また、公民として考えるなかで自己を知る」に至らしめる。歴史家は実例に縛られて人を善行から逃げ出させ、道徳哲学者の説く教訓は一般民衆にはわかりにくい、詩は抽象的な教訓を具体的な実例 - それも当然あるべきもの - でもって楽しく表現する「本当の民衆哲学者」として、墮落している人の魂の導き手なのである。

とすれば、悪徳と情熱 - 怒り、高慢、残酷、色欲等 - を破壊克服して読者がそれを忌み嫌い、美德 - 真の恋愛、友情、知恵と自制、正義等 - を高めて読者がそれに恋するようにならなければならない。そこでどのような色の服を着せるとよいかということが問題になるわけで、言語表現こそ読者説得の要

となってくるわけである。

シドニーは、正しい詩人が美しい英語によって表現した詩が最高に人を楽しく教えて善き行い、換言すれば、美的行為に至らしめることを期待している。私は、シドニーの詩論はそれ自体、レトリックの構成美と表現美をもつ美的行為の重要な一例 – それは、今日にあっても快い、予想される以上に生産的なエネルギーをもって我々を美的な生き方と表現へと駆り立てずにおかないもの – と考える。そこには、シドニーの *ethos* 人柄が *logos* 言葉による内容に肉付けされ、読む者の *pathos* 心を説得する力が発揮されている。美が実践としての学問に直結しているからである。古典的、道徳的そして実践的な美観が軽視されがちな今日、シドニーの意義が改めて見直されるかもしれない。

Works Cited and Consulted

- Aristotle. *The "Art of Rhetoric"*, tr. John Henry Freese. Harvard University Press; William Heinemann Ltd, [1926] 1975 [アリストテレス 『弁論術』 戸塚七郎訳、岩波文庫、1992].
- _____. *Poetics*, tr. Gerald F. Else. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1967.
- Curtius, Ernst Robert. *Europäische Literatur und Lateinisches Mittelalter*. Francke Verlag, 1948 [E. R. クルツィウス 『ヨーロッパ文学とラテン中世』 南大路振一他訳、みすず書房、1971].
- Hadfield, Andrew. *Literature, Politics and National Identity*. Cambridge University Press, 1994.
- Hamilton, A. C. *Sir Philip Sidney: A Study of His Life and Works*. Cambridge University Press, 1977 [A. C. ハミルトン 『サー・フィリップ・シドニー』 大塚定徳・村里好俊訳、大阪教育図書、1998].
- Hardison, O. B., Jr. 'The Two Voices of Sidney's *Apology for Poetry*' [1972], in Kinney, 73-90.
- Kay, Dennis, ed. *Sir Philip Sidney: An Anthology of Modern Criticism*. Clarendon Press, 1987.
- Kinney, Arthur F., ed. *Essential Articles for the Study of Sir Philip Sidney*. Archon Books, 1986.
- Myrick, Kenneth O. *Sir Philip Sidney as a Literary Craftsman*. University of Nebraska

Press, [1935] 1965.

Sidney, Sir Philip. *An Apology for Poetry or The Defence of Poesy*, ed. Geoffrey Shepherd. Manchester University Press, [1965] 1973.

_____. *An Apology for Poetry or The Defence of Poesy*, ed. Geoffrey Shepherd. Manchester University Press, [1965]; rev. and exp. R. W. Maslen. Manchester University Press, 2002.

Spingarn, J. E. *A History of Literary Criticism in the Renaissance*. Columbia University Press, [1899; 1908] 1963.

Wilson, Thomas. *Arte of Rhetorique* [1553], ed. Thomas J. Derrick. Garland Publishing, Inc., 1982.